TIME *Schedule*

各回入替制	12:25	14:40	16:45	19:00
6.20(土)	ふたりのベロニカ	地下道＋初恋	スタッフ	スティル・アライヴ
21(日)	スティル・アライヴ	トリコロール/青の愛	トリコロール/白の愛	トリコロール/赤の愛
22(月)	偶然	平穏	スティル・アライヴ	アマチュア(18:45~)
23(火)	スティル・アライヴ	地下道＋初恋	トリコロール/白の愛	トリコロール/赤の愛
24(水)	デカローグ1/2	デカローグ3/4	デカローグ5/6	トリコロール/青の愛
25(木)	短い労働の日	デカローグ7/8	デカローグ9/10	スティル・アライヴ
26(金)	平穏	スティル・アライヴ	殺人に関する短いフィルム	愛に関する短いフィルム
27(土)	地下道＋初恋	スタッフ	平穏	スティル・アライヴ+トークショー(18:45~)
28(日)	偶然	スティル・アライヴ	短い労働の日	アマチュア(18:45~)
29(月)	アマチュア	地下道＋初恋	愛に関する短いフィルム	殺人に関する短いフィルム
30(火)	トリコロール/赤の愛	トリコロール/白の愛	スティル・アライヴ	傷跡
7. 1(水)	トリコロール/青の愛	愛に関する短いフィルム	平穏	スティル・アライヴ
2(木)	スタッフ	スティル・アライヴ	殺人に関する短いフィルム	煉瓦工＋ある党員の履歴書＋種々の年齢の七人の女
3(金)	スティル・アライヴ	短い労働の日	煉瓦工＋ある党員の履歴書＋種々の年齢の七人の女	偶然(18:45~)
4(土)	スティル・アライヴ	デカローグ1/2	デカローグ3/4	デカローグ5/6(18:50~)
5(日)	煉瓦工＋ある党員の履歴書＋種々の年齢の七人の女	デカローグ7/8	デカローグ9/10	スティル・アライヴ
6(月)	短い労働の日	煉瓦工＋ある党員の履歴書＋種々の年齢の七人の女	傷跡	終わりなし
7(火)	スティル・アライヴ	傷跡	スタッフ	平穏
8(水)	短い労働の日	スティル・アライヴ	地下道＋初恋	スタッフ
9(木)	終わりなし	短い労働の日	地下道＋初恋	スティル・アライヴ
10(金)	スタッフ	平穏	スティル・アライヴ	ふたりのベロニカ
11(土)	スティル・アライヴ	地下道＋初恋	スタッフ	平穏
12(日)	短い労働の日	ふたりのベロニカ	スティル・アライヴ	終わりなし
13(月)	平穏	スティル・アライヴ	短い労働の日	地下道＋初恋
14(火)	ふたりのベロニカ	地下道＋初恋	スティル・アライヴ	スタッフ
15(水)	トリコロール/青の愛	トリコロール/白の愛	トリコロール/赤の愛	短い労働の日
16(木)	地下道＋初恋	スタッフ	スティル・アライヴ	平穏
17(金)	短い労働の日	平穏	スタッフ	スティル・アライヴ

入場料金：一般 1,500円/大学専門学校生 1,300円/会員・シニア1,100円/高校生800円/中学生以下500円(税込)
＊ぴあミニシアター回数券もご使用いただけます。

＊各回定員入替制・整理券制　＊やむを得ない事情により作品及び上映時間が変更される場合がございます
＊上映開始時間が定時でないものがあります。変更時間は各作品のうしろ記載の時間をご確認ください。

『キェシロフスキ・プリズム』開催記念トークショー
6月27日(土)はクシシュトフ・キェシロフスキ監督の誕生日です。イベントを予定しております。詳細情報は公式HPにて

KIESLOWSKI *Books*

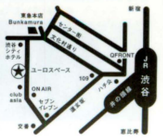
「キェシロフスキの世界」
クシシュトフ・キェシロフスキ著
和久本みさ子訳
定価：2800円+税　河出書房新社刊
好評発売中

「キェシロフスキ映画の全貌」
マレク・ハルトフ著
吉田はるみ＋渡辺克義訳
定価：3000円+税　水声社刊
好評発売中

「ふたりのキェシロフスキ」
アネット・インスドーフ著
和久本みさ子＋渡辺克義訳
水声社より2009年5月刊行予定
(表紙はイメージとなります)

6.20(土)-7.17(金)キェシロフスキ29作品一挙上映
前売券発売中！1回券 1,300円／5回券 5,000円(税込)
前売券、前売回数券につきましては、当劇場及び、各プレイガイドにてお買い求めください。
www.kieslowski-prism.com

渋谷・文化村前交差点左折
ユーロスペース
EUROSPACE
tel.03-3461-0211 www.eurospace.co.jp



クシシュトフ・キェシロフスキ監督特集上映

キェシロフスキ・プリズム

『トリコロール』三部作『デカローグ』の
クシシュトフ・キェシロフスキ監督
その軌跡を追ったドキュメンタリーと日本初公開作品ほか
美と愛と輝きの名作を一挙特集上映

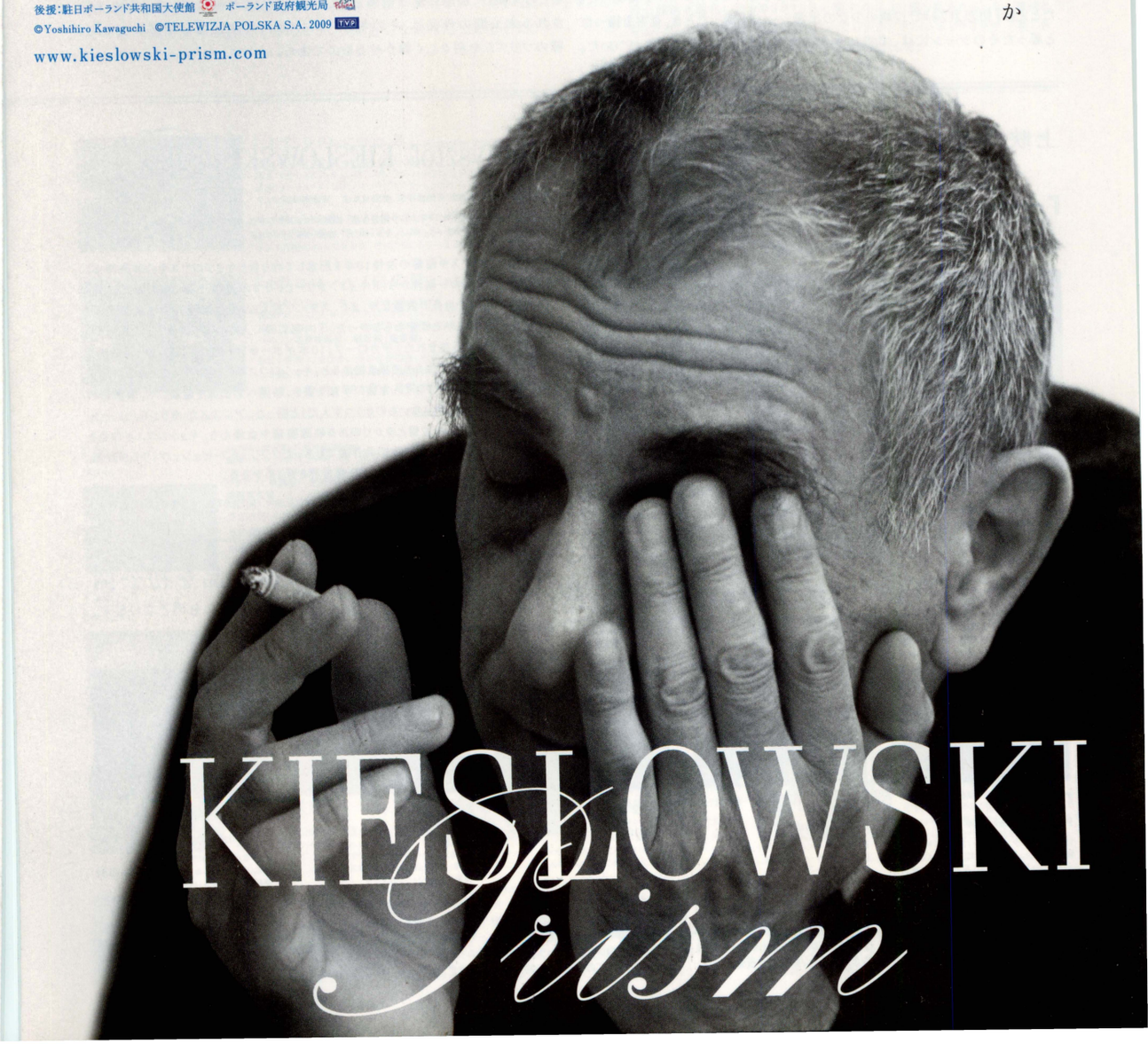
STILL ALIVE
- a film about Kieslowski

directed by Maria Zmarz-KOCZANOWICZ
written by Stanisław ZAWIŚLIŃSKI　photography Andrzej ADAMCZAK
sound Wojciech PLUCIŃSKI, Tomasz SKONECZNY, Paweł KAJSZCZAK, Jan SELIGA
editing Grażyna GRADOŃ　producer Sławomir SALAMON

UNDERPASS, THE FIRST LOVE, STAFF, PEACE AND QUIET, A SHORT WORKING DAY and other films

directed by Krzysztof KIEŚLOWSKI

提供・配給：ワコー／グアパ・グアポ
協力：ピターズ・エンド、洋画★シネフィル・イマジカ、アテネ・フランセ文化センター
後援：駐日ポーランド共和国大使館　ポーランド政府観光局
©Yoshihiro Kawaguchi　©TELEWIZJA POLSKA S.A. 2009
www.kieslowski-prism.com



クシシュトフ・キェシロフスキ監督特集上映

キェシロフスキ・プリズム

KIESLOWSKI *Prism*

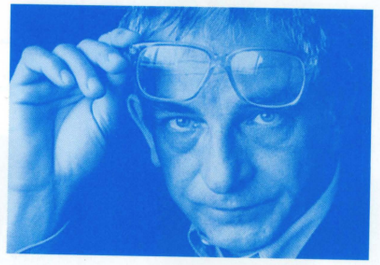
『トリコロール』三部作、『デカローグ』『ふたりのベロニカ』などの傑作を遺し、
その芸術活動の絶頂期に54歳という若さで急逝したポーランドの巨匠クシシュトフ・キェシロフスキ監督。
その軌跡をたどるドキュメンタリー映画『スティル・アライヴ』と、貴重な初期未公開作品を初公開するとともに、
人間の「感情」と様々な「愛」のかたちを見つめ続けた作品群を一挙特集上映。

「われわれの映像文化に影響を及ぼす真のコペルニクス的革命である」
ヨーロッパでクシシュトフ・キェシロフスキ監督がこのような評価を受けたのは、1979年、彼が『アマチュア』を作り、モスクワ国際映画祭でグランプリを受賞した頃であった。
ドキュメンタリーにドラマを混在させて、一度カメラを手にした男が、どこまでも真実を見たいと、カメラを自分に向けるラストは、当時のキェシロフスキの心を表していた。なによりも人間の真実を撮りたいからドキュメンタリーを作る。キェシロフスキの映画製作の原点は、まずそこから出発していたはずだったが、そのドキュメンタリーこそがしばしばキェシロフスキを裏切った。たとえば『初恋』(74)で17歳の少女の出産シーンを撮ったとき、真実を撮ったと思ったそのシーンには、すでに少女の真実が消えているのに気がついた。この少女の真実はどこにあるのか。キェシロフスキの模索は続く。一度、完成したドキュメンタリーを解体して改めてドラマとして演じたり、さらには新しい現実を作意的に作ったり…。そうして生み出したのが、『アマチュア』であったが、キェシロフスキは、それらを発展させてついにドラマにたどりつく。
キェシロフスキは、他の誰もが踏みこむことができない究極の真実が存在するところ――それは死であり、愛の場所であることを知る。キェシロフスキが、純粋感情と呼ぶ美しい感情が生まれるところである。『デカローグ』『ふたりのベロニカ』『トリコロール』三部作はそれらを描いて、世界中の賞を受賞、女たちをとらえ続け、永遠の愛の聖書としていまなお愛され続けている。今回、上映される未公開の作品は、そのキェシロフスキの純粋感情の萌芽を伝えて、彼のプリズムを初々しく輝かせるものである。

上映作品一覧

Krzysztof KIESLOWSKI *Films*

『スティル・アライヴ』
STILL ALIVE - a film about Kieslowski



2005年/ポーランド/82分/デジタル/ドキュメンタリー　マリア・ズマシュ=コチャノヴィチ監督作品　脚本:スタニスワフ・ザヴィシリンスキ　撮影:アンジェイ・アダムチャク
録音:ヴォイチェフ・ブルチンスキ、トマシュ・スコネチュヌィ、パヴェウ・カイシュチャク、ヤン・セリガ　編集:グラジナ・グラドン　製作:スワヴォミル・サワモン

ポーランド映画界の至宝クシシュトフ・キェシロフスキ監督の没後10年を記念して作られたキェシロフスキの映画作りに関する記録映画。学生時代に始まるドキュメンタリー製作から、ドキュメンタリーとドラマの混在、ドラマへの移行に至るまで、20数本に及ぶ作品について、キェシロフスキ自身の貴重な声、また、スタッフ、友人らが証言を行う。作る映画がどのように形を変えても、キェシロフスキの人間のみかたは変わらなかった。「内部に深く入り込んで現実をとらえたい。」キェシロフスキはいつもそう語っていた。悲しみから生まれた『デカローグ』10本がポーランドを越えてヨーロッパで認められた後、究極の人間存在である“死と愛”の姿を女性たちで描き始めると、キェシロフスキの映像のプリズムはさらなる輝きを持って女優たちをも魅了した。カトリーヌ・ドヌーヴはそんな彼に手紙を書き、映画への出演を懇願した。映画祭のトイレで親しくなったヴィム・ヴェンダースは、「彼は目に見えないものをうつす人だ」と語った。アニエスカ・ホランド、イレーヌ・ジャコブ、ジュリエット・ビノシュといったキェシロフスキ監督とゆかりのある映画監督や女優たち、キェシロフスキ作品を支えた作曲家ズビグニェフ・プレイスネルと著名な弁護士で脚本の共作者でもあったクシシュトフ・ピェシェヴィチらが登場。「内面に迫りたい」「人間の真実を描きたい」とするキェシロフスキの映像世界をきらめかせる。

(このドキュメンタリー作品のタイトルは、英語での挨拶“How are you?”に対してキェシロフスキがきまって“Still alive.[まだ生きてるよ]”と答えていたことによる。)

ドキュメンタリーからドラマへと移行していく時期の貴重な日本未公開作品を初公開

今回上映することがかなった日本初公開の作品群は、権利関係上DVD発売が出来ないこともあり、上映自体が貴重なものとなります。
＊「地下道」以外はデジタル上映です。　＊上映作品には一部、製作年が古いため映像にノイズがあるものがございますがご了承ください。

『地下道』
Przejście podziemne

1973年/ポーランド/29分/35mm/ドラマ
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、イレネウシュ・イレディンスキ　撮影:スワヴォミル・イジャク出演:テレサ・ブジシュ=クシジャノフスカ、アンジェイ・セヴェルィン

ワルシャワ中央駅の地下道。妻との不仲をとり戻そうと、一角で妻と一夜をともにする男。そんな2人を覗き見する人。ナレーションはキェシロフスキ自身。

『初恋』
Pierwsza miłość

1974年/ポーランド/52分/ドキュメンタリー
撮影:ヤヴェック・ペトルィツキ
編集:リディア・ゾン
クラクフ短編映画祭グランプリ受賞

17歳のヤチカ。妊娠がきっかけで20歳の学生と結婚することに。ドキュメンタリーとはいえかなりの演出が加えられ、私的な出産シーンに微妙な反応を持つ。

『スタッフ』
Personel

1975年/ポーランド/67分/ドラマ
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ
撮影:ヴィトルト・ストク
出演:ユリウシュ・マフルスキ、ミハウ・タルコフスキ
マンハイム映画祭グランプリ受賞

映画演劇技術学校で学び、衣装係の仕立屋となる少年ロメクが味わう芸術の理想と現実。ヴロツワフのオペラ座に映画大学生も加わっての撮影。自伝的作品。

『平穏』
Spokój

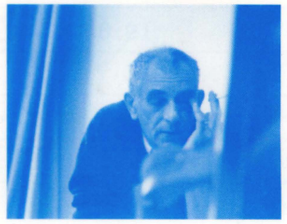
1976年/ポーランド/82分/ドラマ
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ
撮影:ヤツェク・ペトルィツキ
出演:イェジ・シュトゥール、ダヌタ・ルクシャ
グダニスク映画祭審査員特別賞受賞

3年の刑を終えて出所した平凡な男の不自由。彼の夢は「女、子供、マイホーム」。小さな町での小さな願望は実現できず、映画じたいも公開禁止に。

『短い労働の日』
Krótki dzień pracy

1981年/ポーランド/74分/ドラマ
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、ハンナ・クラル
撮影:クシシュトフ・パクルスキ
出演:ヴァツワフ・ウレヴィチ、タデウシュ・バルトシク

1976年、ラドムで、食料価格の高騰により暴動が起き、ポーランド全土に広がる。が、事件の真髄をとらえたこの再現ドキュメントは上映を差し止められる。



クシシュトフ・キェシロフスキについて　和久本みさ子(映画評論家)

映画『スティル・アライヴ』の冒頭には、キェシロフスキの出生に関する興味深い描写がある。まず彼がワルシャワのような都会の人間ではなく、貧しく、両親、妹の4人で各地を転々としていたこと。キェシロフスキがごく初期に『レントゲン』のタイトルでサナトリウムのドキュメンタリーを撮っていたこと。この2つは、人間として、また、アーチストとして決定的な2つの重要な要素をキェシロフスキに与えた。つまり、キェシロフスキの父は結核で、そのため、キェシロフスキ自身結核に冒され転地療養したことがあることを語っている。キェシロフスキは療養先でなにもすることがなく、「ひなたのベンチで毛布にくるまり、よく本を読んでいた」と言う。そうして培われた文学への知識は、キェシロフスキを深い思考を持つ人間に育て、レントゲンのように深く、人間を観察する目を育てた。

message from Juliette Binoche

キェシロフスキに「ありがとう」としか言えなかった。
――ジュリエット・ビノシュは語る――

私は自分が出演した映画を滅多に観ることはありません。ナルシストではありませんから。でも、例外はあります。たとえば、クシシュトフ・キェシロフスキ監督の『トリコロール/青の愛』です。この映画はなんども観ましたが、初めて観た時から「ありがとう」としか言いようのない映画でした。とにかく、編集がすばらしいのです。キェシロフスキは、シーンとシーンの間を黒というか闇で繋いでいくのです。なんども観ているとそこから世界がひろがっていくのがわかります。そして私の役も深みが出てくるのです。予想もしなかったことでした。
(2009年2月 Lancomeによる来日時インタビューより)

KIESLOWSKI *profile*

1941年6月27日ポーランドのワルシャワに生まれる。64年にウッチ国立映画大学に入学し、記録映画を学び、70年代には多くの優れたドキュメンタリーを製作する。79年、『アマチュア』がモスクワ国際映画祭でグランプリを受賞し、世界的に注目されることになる。88年にはモーゼの十戒をモチーフにしたTVシリーズ『デカローグ』を発表。その第5、6話を『殺人に関する短いフィルム』(87)『愛に関する短いフィルム』(88)として劇場用に再編集。カンヌをはじめ各国の映画祭で取り合いになるほど大絶賛された。91年『ふたりのベロニカ』でイレーヌ・ジャコブにカンヌ国際映画祭主演女優賞をもたらす。93～94年にかけてフランス国旗「自由/平等/博愛」をテーマに『トリコロール』三部作を発表。ヴェネチア、ベルリン、カンヌ国際映画祭に連続出品。世界中がその次回作を待ち望むなか持病の心臓病が悪化し、96年3月13日心臓発作により還らぬ人となった。遺稿となったダンテの「神曲」三部作から、『ヘヴン』(02)をトム・ティクヴァが、『美しき運命の傷痕』(05)をダニス・タノヴィッチが映画化した。

『ふたりのベロニカ』Podwójne życie Weroniki

1991年/フランス=ポーランド/92分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ
出演:イレーヌ・ジャコブ、ハリナ・グリグラシェフスカ
カンヌ国際映画祭　主演女優賞、国際批評家連盟賞、全キリスト教会賞

キェシロフスキは言った。「世界のどこかに、自分と同じ名前、同じ姿をしたもう一人の自分がいるはずだ」。ポーランドのベロニカは、ある日、クラクフの街のバスのなかに、ほんとうにもう一人の自分を見つけた…。

『トリコロール/白の愛』Trzy kolory:Bialy

1994年/フランス・ポーランド/92分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ
出演:ジュリー・デルピー、スビグニェフ・ザマホフスキ
ベルリン国際映画祭　銀熊賞(監督賞)

白は「平等」。まばゆい光のなかの白いウエディングドレス。白い鳩の落とす糞。ヴィスワ川の白い雪。小悪魔のジュリー・デルピーの白い肌。ポーランドからやってきた男は、言葉の不平等のなかで愛を失う。

『トリコロール/青の愛』Trzy kolory:Niebieski

1993年/フランス/99分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ
出演:ジュリエット・ビノシュ、ブノワ・レジャン
ヴェネチア国際映画祭　金獅子賞、主演女優賞、撮影賞

フランス国旗の3色の意味を問う3部作。青は「自由」。青いガラスのモビール。水の青。青い闇。青の支配する世界のなかで、夫と娘を事故で失ったジュリーの人生の再生。全管の音楽の美しさと対位法に導かれての自由。

『トリコロール/赤の愛』Trzy kolory:Czerwony

1994年/フランス・ポーランド・スイス/96分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ
出演:イレーヌ・ジャコブ、ジャン=ルイ・トランティニャン
カンヌ国際映画祭正式出品

赤は「博愛」。恋人がベッドに残した赤いバーカー。ヒロインの横顔を写す巨大な赤いスクリーン。ヴァランティーヌは、シェパード犬リタの赤い紐に導かれ、元判事を知り、若き彼を思わせる恋人と運命の出会いを果たす。

『傷跡』
Blizna

1976年/ポーランド/104分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ　出演:フランチシェク・ピエチュカ、イェジ・シュトゥール
グダニスク映画祭　主演男優賞、審査員特別賞受賞

キェシロフスキにとって劇場公開用の最初の劇映画。20年ぶりに故郷に戻り、反対を押し切って化学工場を建設する中年の工場長。破壊される森林や家は…。

『アマチュア』
Amator

1979年/ポーランド/112分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、イェジ・シュトゥール
出演:イェジ・シュトゥール
モスクワ国際映画祭　グランプリ、国際批評家連盟賞受賞

生まれたばかりの赤ん坊を8ミリで写していて、映画の魅力にとりつかれた男。アマチュアだ。写してはいけないものを写し、ついには、自分にカメラを向ける。

『偶然』
Przypadek

1981年/ポーランド/119分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ
出演:ボグスワフ・リンダ、タデウシュ・ウォムニツキ
グダニスク映画祭　主演男優賞、脚本賞受賞

1970年代のポーランドを活写した芸術がどうして映画以外にないのか。その結果、キェシロフスキは内面の世界を描く『偶然』を生む。人間の運命の“もし”の3つ。

『終わりなし』
Bez końca

1984年/ポーランド/109分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ　音楽:ズビグニェフ・プレイスネル　出演:グラジナ・シャポウォフスカ、イェジ・ラジヴィオヴィッチ

戒厳令下での夜間外出禁止令と軍支配の現実を、ドラマで描いた作品。亡くなった夫を追い、自殺した妻はともに旅立つ。タイトルは当初『ハッピーエンド』。

『殺人に関する短いフィルム』
Krótki film o zabijaniu

1987年/ポーランド/85分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ　出演:ミロスワフ・バカ、クシシュトフ・グロビシュ
カンヌ国際映画祭　審査員賞、国際批評家連盟賞受賞

約7分間の少年によるタクシー運転手の殺害シーンと5分間の法による少年の絞首刑シーン。緑色のフィルターを使ったことで、残酷、虚無の度は強まった。

『愛に関する短いフィルム』
Krótki film o miłości

1988年/ポーランド/87分/35mm
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ　出演:グラジナ・シャポウォフスカ、オラフ・ルバシェンコ
サン・セバスティアン映画祭　国際批評家連盟賞、審査員特別賞、全キリスト教会審査員賞 受賞

挑発的で美しいマグダ。だが、それはいったい誰の視点から。私たちはつねに愛している人間の目をとうして世界をみている。彼女を覗くトメクのように。

『煉瓦工』Murarz

1973年/ポーランド/18分/35mm/ドキュメンタリー
撮影:ヴィトルト・ストク
編集:リディア・ゾン

メーデーの式典に出かける煉瓦工の生い立ちと、共産主義イデオロギーへの傾倒。

『ある党員の履歴書』Życiorys

1975年/ポーランド/45分/35mm/ドキュメンタリードラマ
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、ヤヌシュ・ファスティン
クラクフ短編映画祭ブロンズ・ライニック賞受賞

ポーランド共産党がある党員を取り調べることで党のシステムの本質を描いたドキュメンタリー。

『種々の年齢の七人の女』
Siedem kobiet w różnym wieku

1978年/ポーランド/16分/35mm/ドキュメンタリー
クラクフ短編映画祭グランプリ受賞
※(参考上映)日本語字幕なし

バレー学校。舞台裏の日常と練習風景。少女から年長のバレリーナまで、その表情を凝視し活写する。

『デカローグ』Dekalog

1988年/ポーランド/テレビドラマ/デジタル
脚本:クシシュトフ・キェシロフスキ、クシシュトフ・ピェシェヴィチ
音楽:ズビグニェフ・プレイスネル
ヴェネチア国際映画祭国際批評家連盟賞、他

聖書に登場するモーゼの「十戒」をモチーフに創られた10篇のオリジナルストーリー。

第一話「ある運命に関する物語」(53分)
第二話「ある選択に関する物語」(58分)
第三話「あるクリスマス・イヴに関する物語」(55分)
第四話「ある父と娘に関する物語」(55分)
第五話「ある殺人に関する物語」(57分)
第六話「ある愛に関する物語」(58分)
第七話「ある告白に関する物語」(55分)
第八話「ある過去に関する物語」(55分)
第九話「ある孤独に関する物語」(58分)
第十話「ある希望に関する物語」(57分)